

水田の生物多様型管理

～～～メダカやドジョウの棲む水田～～～

吉 田 薫

山王寺棚田で7月27日(土)に開催された「田んぼの学校 自然調べコース」の打合せ兼下見に参加した。(山王寺棚田の概要や棚田オーナー制度については過年度に複数の分科会メンバーが報告しているので省略する。)当日はあいにくの雨天であったが、小雨になるのを見計らって実行委員会の中心メンバーの方に水田やため池を案内してもらった。

水田の中にオーナー管理の無農薬栽培田があったが、田植えの時期が少し遅かったということで、稻よりも雑草の勢いが強かった。また、他にも耕作放棄地があり、そこは雑草が繁茂する状態となっていた。水田耕作は雑草との戦いであり、ましてや遠方に住むオーナーによる無農薬栽培ではその状況が一層厳しいものになることを実感した。

山王寺では直面する課題となっていないようだが、活動メンバーの高齢化が進み、活動自体が下火となるということもあるだろう。



写真-1. 山王寺棚田



写真-2. 雜草が優勢な水田



写真-3. 田んぼの学校・自然調べコースのポスター



写真-4. 用水を供給するため池

以下、雑草対策や維持管理の問題を、持続可能性や生物多様性の見地から検討したい。

問題を再整理する。

放置された水田では、雑草がはびこり、水漏れが生じる。そして、周辺の水田に悪影響を与える。

水田の管理に手間がかかる。固定化した活動メンバーの高齢化が進めば、ますます大変になる。

したがって、水田を守りつつ交流活動を継続していくには、労力をあまりかけずに雑草を抑制し、なおかつ楽しいという方法を探らねばならないと思う。

その解答は、先に紹介した「田んぼの学校 自然調べコース」にあるように思う。子供たちにとっては、水田やその周辺に棲む魚や昆虫を捕ったりすることが面白いのである。付添いの親の世代は子供が喜ぶ姿がうれしく、また昔の経験を思い出す。

つまり、水田を生産活動から切り離して生き物を育てる場と割り切れば、維持管理の手間が大幅に省け、かつ楽しさのある方法ではないか。生き物のシーズは農業用水から供給される。ため池が水源であれば、そこに棲むメダカ、ドジョウ、エビなどが流下してくる。河川が水源であれば川に棲むコイ、フナ、ナマズなどがやってくる。

似た方法に一年中田に水を張るという「ふゆ水田んぼ」があるが、「生き物田んぼ」では生産よりも生物の生息を優先する。維持管理は「生き物田んぼ」の方が楽である。

雑草対策や環境遷移の抑制を行いつつ、田に水を張って生き物が増えるのを待つ。作業としては、農業機械による田起こし等は行う。田起こしすることによりミジンコやプランクトンが発生するということもあるだろう。生き物の数や種類が少なければ、同じ水系の近隣の川や池からとってきて放流すればよい。

そして、生き物が繁殖した夏場には都会地の子供たちを招待して魚とりなどを行う。収穫祭には生産を伴わない「生き物田んぼ」のオーナーにも来てもらう。ここに持続可能で、維持管理の楽な、楽しい田んぼが実現する。

休耕地や耕作放棄地が増加しつつある昨今、多様な水田管理の選択肢の一つとならないだろうか。



写真-5.ため池の生き物
(メダカ、エビ、オタマジャクシ、水生昆虫類)

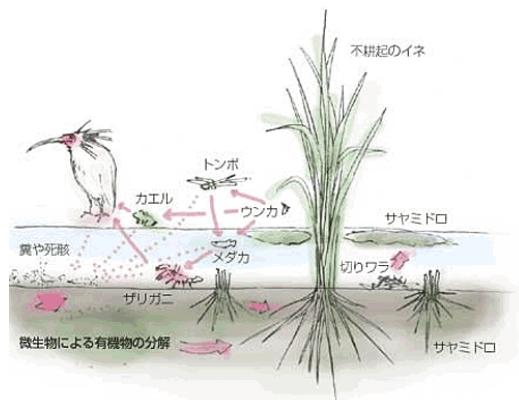


図-1.ふゆ水田んぼの生き物
NPO 法人メダカのがっこ HP より